

当院における下肢薬剤性バルーン IN. PACT の治療成績

【はじめに】当院では 2018 年 8 月より下肢治療において薬剤性バルーン IN. PACT を導入し施行しており、今後使用数が増えていくことが予想される。

【目的】下肢治療用薬剤バルーン IN. PACT の治療成績および、ABI による治療効果の検証を行った。

【対象及び方法】2018. 8. 20～2019. 04. 18 に当院で施行した 26 症例(男性:12 名、女性:14 名、平均年齢 73. 5±8. 3 歳)を対象に、Risk factor 罹患率、TLR 率、病変部ごとの施行率、治療前後の ABI 比較を行った。

【結果】Risk factor 罹患率は、DM:34. 6%、HT:65. 3%、HL:34. 6%、Smoke:23. 0%、FH:0%、HD:0%であった。治療部位は SFA:92. 3%、popA:3. 9%、ATA:3. 9%と、SFA が非常に多かった。施行対象患者は、ステント内再狭窄にする症例が 17 例、新規病変の症例が 9 例であった。PTA 施行前の ABI が平均 0. 69 だったのに対し、施行後には平均 0. 91 と改善された。施行した全ての症例で TLR は確認されなかった。

【考察】日本における保険適応が大腿動脈に対しての治療のみのため、治療部位の大半が浅大腿動脈であった。IN. PACT は約 3 分間のバルーンインフレーションが推奨であるため、ロングインフレーションを行ったことから、狭窄率の改善によって内腔が確保され、治療後の ABI 改善につながったと思われる。

【結語】導入してから使用する頻度が少ないため今後症例数を増やし、詳細な検証を行っていく必要がある。また、保険適応の範囲が広がり大腿動脈や膝窩動脈などステント留置が困難な部位に対しても施行できるようになれば、治療の選択肢が更に広がる可能性がある。